



「見たり、聞いたり、探ったり」No.279

通算 No.430

青木行雄

奈良・東大寺(華嚴宗大本山)、散策 「大仏殿」(世界一の木造建築)・南大門

現在も、新型コロナウイルス感染症が終息せず、ロシアのウクライナ侵攻が世界に大きな不安と物価高をもたらしているが、この東大寺の歩んだ道も疫病や戦乱から復興の歴史をたどっている。

大仏が開眼した天平時代、九州地方から拡大した天然痘、そしてやはり九州で起きた藤原広嗣ひろつぐの乱で、人々は疲弊していたと言われる。

当時、国を天災や人災が襲うことは、政をつかさどる天皇の責任と考えられていた。聖武天皇は「国民はすべて知識(仏教を支える人)」と唱え、世の平安と繁栄を願い、約260万人の力を借りて大仏さまと大仏殿を建立したと言われている。

仏師・運慶らによる金剛力士像が立つ南大門は、鎌倉時代の建物で見ると歴史を感じ、おもわず見入ってしまった。

源平合戦の中、平重衡たいらのしげひらによる「南都焼き打ち」で東大寺も大仏殿など多くの建物を焼失した。

南大門は重源上人ちゅうげんの勸進(物品、労力の寄付集め)や、源頼朝みなもとのよりともらの助力による復興を象徴している。

その南大門の柱には、たくさんのくぼみがあった。戦国時代、奈良を舞台に対立した三好三人衆と松永久秀の軍が、火縄銃による銃撃戦を繰り広げた時の弾痕だという。

この戦いで大仏殿は再び焼失し、その後約140年後の江戸時代中期に再建されたのが、現在の大仏殿である。こんな歴史を知るとおもわず心をうばわれてしまう。

今回もこの「大仏殿」について、過去何回か記した事はあるが、2回も焼失し、3回目に建立されたという現存の建築物にコロナ禍の中で特に願望の眼差しで熱い思いに手を触れながら視点を変えて確認してきた。

大仏殿(金堂)

お寺の本尊ほんぞんを安置するお堂こんどうを金堂というが東大寺では盧舎那仏るしゃなぶつ坐像を安置する大仏殿がそれにあたる。

東大寺は「聖武天皇」しょうむてんのうの発願で大仏の造立が始まったことに端を発するお寺である。

大仏殿は、まさに東大寺の中心的存在である。「奈良の大仏さま」として親しまれているこの大仏は、正式には盧舎那仏るしゃなぶつ、毘盧



ドローンによる「大仏殿」全景、
パンフより

舎那仏という、古代インドのサンスクリット語のヴァイローチャナ仏を漢字にしたもので、その意味は、光輝くほとけ、世界をあまねく照らすと、華嚴経に説かれているという。

西暦745年(天平17)、現在地に銅造の大仏がつくられることが決まった。土台づくりや大仏の型をつくる作業などを経て、^{ちゅうぞう}鑄造が開始されたのが747年(天平19)で計画から2年後だった。

大仏が完成し、^{かいげんくようえ}盛大な開眼供養会が営まれたのはそれから5年後の752年(天平勝宝4)のことである。

完成した大仏は高さ18m、使われた銅は500tと推定され、大仏殿は大仏の鑄造が終わった749年(天平勝宝元)ごろから建設が始まり、開眼供養の際には未完成で757年(天平勝宝9)の聖武天皇一周忌には完成したのではないかと推定されているようである。これが、東大寺創建時の大仏と大仏殿の経過である。

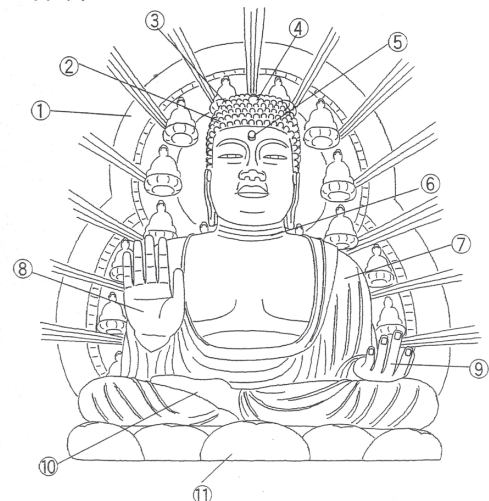
現在の大仏は、その創建から何度となく修理をくりかえしたもので、お顔をはじめ上半身のほとんどは、江戸時代に新しく鑄造・修理されたものにかわっているという。なぜこのような大規模な修理が行われたかという、造立以後、1180年(治承4)と1567年(永禄10)の2度、兵火によって大きな被害を受けたからである。この時、大仏殿も焼失している。

大仏殿は、最初の兵火で焼失後、1195年(建久6)に再建したが、1567年の焼失後は長く再建がかなわず、125年後の1692年(元禄5)によようやく再建された。現在の大仏殿は、この江戸時代の3代目の建物である。正面は57mを超え、高さは約49m、木造建築としては、世界最大の大きさを誇っている。江戸期には、大仏殿を取り囲む廻廊、正面の中門、東西の楽門(いずれも重文)も再建された。

大仏殿は、2度の兵火で、残念ながら創建当初の姿はまったく失われたようだ。創建時は、中国・唐の様式をとり入れたもので現在の大仏殿より、正面は1.5倍大きかったことが図面を見てもおわかりだろう。

1704年(宝永元)～1711年(正徳元)再建の大仏殿は間口(幅)が焼失前約88mが、再建後は約57mと縮

盧舎那仏



- | | |
|------------------------|-------------------------------|
| ①光背(こうはい) 光の造形化 | ⑦衲衣(のうえ) 長い方形の布 |
| ②螺髮(らほう) 貝がらのような形に巻いた髪 | ⑧施無畏印(せむいいん) 手を上げ、てのひらを外に |
| ③肉髻(にくけい) 頭の盛り上がった部分 | ⑨与願印(よがんいん) 手を差し出し、てのひらを外に |
| ④肉髻珠(にくけいしゅ) 智慧の光明を象徴 | ⑩結跏趺坐(けっかふざ) 両足を交差させ、両足先を腿の上に |
| ⑤白毫(びやくごう) 渦巻く毛を造形化 | ⑪蓮華座(れんげざ) 蓮華形の台座 |
| ⑥三道(さんどう) ふくよかな首の表現 | |

盧舎那仏の説明だが②螺髮(らほう)という貝がらのような形に巻いた髪が何個あるか、大仏にはかならずあるので興味があつたはずねたら、何と「492個」あるという、おどろきであった。実物を見学して下さい。



「大仏殿」(東大寺金堂)を正面から写す。ドでかい建築物であった。

正面57m

側面50.5m

高さ48.7m

江戸時代(宝永6年・1709)国宝

小さされた。現地、現場では昭和に入ってから縮小の部分の元の大きさがわかるように砂利敷きの広い空間が見られる。

縮小の背景には資金難とともに、深刻な用材(木材)不足があった。奈良時代や鎌倉時代のような巨木が十分に見つけれず、多数の木材を東ね、鉄のたがで締めた集木材が使われた。今回見て来たが、何んと全部大きさはおなじではないが直径約1.5mの柱が60本もあり、写真でおわかりのように下から上まで8ヶ所程の鉄帯でまかれていた。

巨大な屋根を支える梁^{はり}だけは、公慶上人が日向(宮崎)で23.6mの巨木2本を調達し、海運業者・志布志の弥五郎の協力で、鹿児島湾から木津(京都府)まで水路で運んだという。木津から奈良までは200~300人のボランティアが綱で引いて運んだといわれる。

あの大きな「大仏」をどうして制作したのか大変興味があったので、くわしく調べてみた。

大仏の制作について

大仏は、銅を^{いがた}鑄型で固める^{ちゅうぞう}鑄造という技法で作られている。大きく重く、運ぶことができないので、現在安置されている場所で制作された。

まず、完成作とほぼ同じ大きさの大仏を粘土でつくる。これが原型、原型が乾いたら、その原型を、さらに粘土でおおう。この粘土の厚みは約30cmは必要。これが外型である。外型は外して、乾燥させておく。

その次は原型の表面を削ってひと回り小さくする。そこに乾燥した外型をかぶせると、原型と外型のあいだに、すきまができる。そこに、熱い銅を流し込む。この原型と外型をつくるだけで、1年以上かかったと推定される。

次は、いよいよ^{ちゅうぞう}鑄造だが、まず原型と外型を固定するために、その周囲に土を盛る。これは鑄造するための足場ともなるもので、土の丘をつくるという方がいいかもしれない。その丘に、銅を溶かすための炉を設置する。そうして、溶かした銅を流し込んでゆくのだが、大仏はあまりに大きいため、丘を順々に高くして、8回に分けて行われたといわれている。こうすると、最終的には、丘をつくった土で大仏がおおわれてしまう。銅が冷えてから土山を崩すと、大仏があらわれるという寸法である。

爆発の危険もともなう鑄造は、わずか3年でなしとげられた。きわめて高い技術をもった工人集団により、東大寺大仏というモニュメンタルなほとけが生み出されたのである。



東大寺の案内図、広大な広さにおどろくが近くには春日大社や、興福寺等が点在している。

大仏の制作にたずさわったのは、造東大寺司という国の機関という。その規模は大きく、造仏所、鑄仏所、木工所などの多くの支社があり、建築、彫刻、絵画など各分野の優秀な工人が集められていた。

大仏造営を指揮したのは、造仏長官の国中連公麻呂(? ~ 774)といわれている。この造東大寺司が、平安時代初期まで、東大寺のさまざまな造立事業を行なった。



集木材の柱
全部で60本あるという。

東大寺は国分寺として建立され国家の安寧と国民の幸福を祈る道場であったが、同時に仏教の教理を研究し学僧を養成する役目もあり、華嚴をはじめ奈良時代の六宗(華嚴・三論・俱舎、成実、法相、律)、さらに平安時代の天台と真言も加えた各研究所(宗所)が設けられ、八宗兼学の学問寺となり、多くの学僧を輩出している。

聖武天皇の発願により創建された東大寺の本尊(大仏さま)であり、天皇は、人々が思いやりの心でつながり、こども達の命が次世代に輝くことを真剣に考えられ、動物も植物も共に栄えることを願い、さらに造像にあたっては、広く国民に「一枝の草、ひとにぎりの土」の助援をよびかけている。

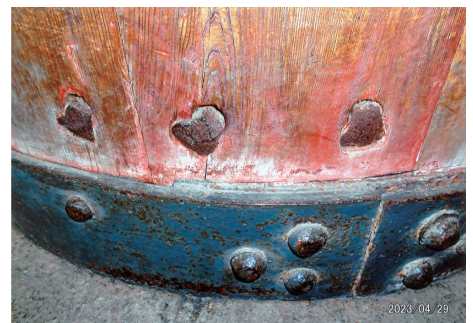
つまり、大仏殿の造立は政府の事業というばかりでなく、国民に結縁を求め、助力によって完成しようとした点に従来の官大寺建立とは明らかに異なるものがある。いわゆる大衆を知識(協力者)として造立を果たそうとしたもので、この精神が東大寺では各時代の再興や修理にあたって実行され現在に至るまで常に相承されているという。



柱は直径1.5m。上まで8本ぐらい鉄板がまかれていた。
柱は桧材である。
節ありはかまわず使われているようだ。
1本の柱で中まで入れると20本以上か?

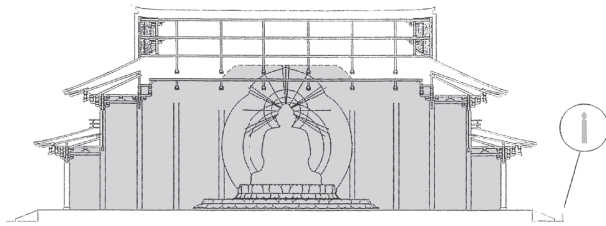


1枚1枚大釘でとめられている中間部分



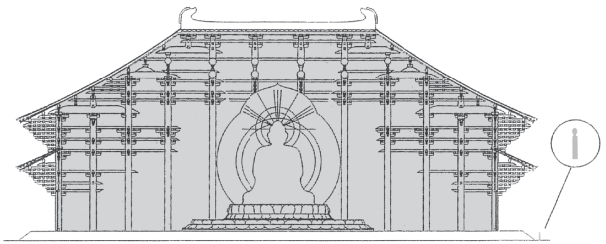
柱の地面部分、銅板でがっちりまかれていた木造部分、ばらつかないように大釘でとめられている。

創建時の大仏殿



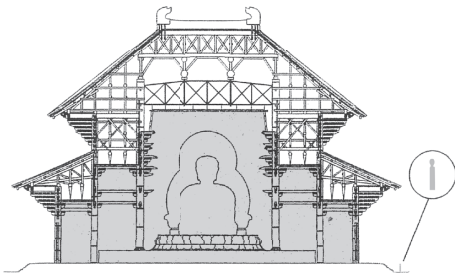
(図は福山敏男氏の推定に基づく)

鎌倉時代再建の大仏殿



(図は大岡實氏の推定に基づく)

江戸時代再々建の大仏殿



(図は修理報告書の実測図に基づく)

グレーの部分は、堂内に入った時に見える空間を示す。
各図右下の印は、人間(身長170cm)の大きさを示したもの。

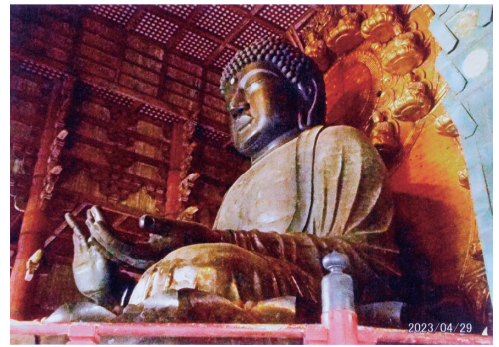
とにかく、世界一という木造建築の雄大な景観、寄木による巨大な柱60本、大仏殿の中に広がる内木、すごいと言う他はない。大木がなければこの方法もあったんだという昔の知恵、江戸城再建に努力を重ねている今、この建築物はとにかく必見で参考になる所、大であった。

令和5年5月28日記

参考資料

ガイドブック東大寺

朝日新聞



像高14.98m、目長1.02m、耳長2.54m、
顔長5.33m、鼻高0.5m、台座高3.05m



内部、木造の様子、柱本数60本



南大門、入口、当日外人が多く、びっくりした。
焼けのこりの鎌倉時代の建築物。
高さ25.46m
鎌倉時代(正治元年・1199) 国宝



仏師・運慶らによる金剛力士像(木造)の南
大門
迫力満点、すごい。ゆっくり必見。
像高8.38m
鎌倉時代、国宝